

—

次の文を読んで、後の問に答えよ。(四〇点)

「おまえはじぶんが生きなければならぬように生きるがいい」という言葉が、好きだ。ロシア革命直前のモスクワの貧民街に生きる人びとの真実を生き生きとえがきだしたロシアの作家レオニード・レオーノフの最初の長篇『穴熊』の第一部にでてくる、名もない老帽子屋がポツンとつぶや呟く印象的な言葉だ。

この帽子屋は、生涯一日に一個の帽子をつくりつづけてきた。「おれはもう老いばれだ、どこへゆくところがあるろう？ 慈恵院へも入れちゃくれねえ……おら血も流さなきや、祖国を救いもしなかつたからなあ。しかも目の奴あ——畜生め——針を手にとりあげてみても、針もみえねえ……糸もみえねえ。だからさ、な、若えの、おら役にもたためるところをいつも無駄に縫つてるんだ……⁽¹⁾ただこの手、手だけがおれをだま欺さねえんだ……」

そして帽子屋は、レーニンの軍隊がクレムリン砲撃をはじめめる前日のきびしく冷めた真夜中に「ふるくなった帽子のように」誰にも知られず、石造の粗末なアパートの隅でひっそりと死んでゆく。

ポーランドの小さな町オシフィエンツムからはじめた、失われた時代の、失われた人びとの、失われた言葉へのひとりの旅をつづけるあいだ、いつもわたしの胸の底にあったのは、若いレオーノフが感傷をまじえずに書きこんだ、その無名のロシアの帽子屋の生きかたの肖像だった。この帽子屋の生死には、⁽²⁾生きることをじぶんに引きうけた人間に特有の自恃じじと孤独が、分かちがたくまぎつていた。その「じぶんが生きなければならぬように生きる」一個の生きかたこそ、わたしたちがいま、ここに荷担すべき「生きる」という行為の母型なのだと、わたしにはおもえる。

生きることをじぶんにとつての「生きる」という手仕事として引きうけること——帽子屋の手は、かれがどんなに老いばれて目が見えなくなってしまうっていても、その仕事をいっしんに果たしつづけた。それは、かれの仕事が、ほんとうは日に一個ずつ帽子を完成することそれ自体ではなく、日に一個ずつ帽子をつくるというしかたで、その手をおしておのれの「生きる」という手仕事をしとげてゆく、ということにあったからだ。生きるとは、そのようにして、日々のいとなみのうちにみ

ずからの「生きる」という手仕事」の意味を開いてゆくという、わたしの行為なのだ。

それがどんなにいかなる政治体制のもとに圧されて果たされる生であるようにみえ、また「血も流さなきや、祖国を救いもしない」生にみえようと、ひとがみずからの生を「生きる」という手仕事」として引き上げ、果たしてゆくかぎり、そこにはけつして支配の論理によって組織され、正統化され、補完されえないわたしたちの「生きる」という手仕事」の自由の根拠がある、というかんがえにわたしははたしたい。「生きる」という手仕事は、それがどんなにひっそりと実現されるものであろうと、権力の支配のしたにじつとかがむようにみえ、しかもどんな瞬間にもどこまでも権力の支配のうえをゆこうとするのだ。

一九三〇年代の日本をもっともよく生きた詩人のひとりだった伊東静雄は、敗戦後、復員してすぐ軍服のままたずねてきた若い作家が、戦争中右翼的なことを強く主張し指導者面をしていた連中が早くもアメリカ仕込みの民主主義の指導者面をしていることにたいする不快感を述べると、人間はそれでいいのですよ、共産主義がさかんな時は共産主義化し、右翼がさかんな時は右翼化し、民主主義が栄えてくれば民主主義になるのが本当の庶民というもので、それだからいいのですと、その軍服姿を戦争中のいやな軍部の亡霊をみたように不快がって、若い作家をおどろかせた、といわれる。

その挿話はわたしにはとても印象的な記憶としてのこっているが、しかしこの伊東静雄のような「庶民」のとらえかたは、わたしにはまさに「本当の庶民」像の倒錯にすぎないようにおもわれた。わたしのかんがえは、ちがう。「本当の庶民」ということをいうならば、共産主義の時代がこようと右翼がさかんな時世がこようと民主主義の世の中がこようと、人びとはけつして「共産主義化」も「右翼化」も「民主主義化」もせず、みずからの人生を、いま、ここに「生きる」という手仕事」として果たしてゆくにほかならないだろうからだ。

「生きる」という手仕事を果たすという生きかたは、だから、⁽³⁾そのときそのときの支配の言葉を^{ひき}販いで生きのびてゆく生きかたを、みずから阻んで生きるわたしの生きかたなのだ。

生きることをみずからの「生きる」という手仕事」としてとらえかえすということは、ひとりのわたしを他の人びとのあいだで自律的につかみなおすこと、そうしてみずからの生きかたを、日々の布地に刺し子として、不断に刺縫いしてゆくということ

だ。『六熊』の帽子屋のように一日一個ずつ帽子をつくってゆく行為でさえ、それが〈生きる〉という手仕事⁽¹⁾のいとなみを手離さなかつたかぎりにおいて、その行為は意識的にせよ無意識にせよ、社会の支配をささえるようにみえながら同時に社会の支配をみかえす無名の行為のひとつとして、社会の支配のついにおよびない自由を生きる本質をふかくそなえていたはずだ。

ある詩人が正確に書いたように、人の生は I was born という受け身にはじまる。すなわち、ひとは偶然に生まれて、ほんとうに死ぬ存在である。こうした生のありようを、わたしたちは正しくうけいれるべきだ。なぜなら、それがわたしたちの歴史だからだ。

そうでなければ、なぜ一所懸命に、ひとは生きて、死ぬのか。いま、ここにじぶんが生きているという事実をまっすぐに引きうけることができないかぎり、わたしたちは、ほんとうに死ぬものとしてのじぶんをもみうしなってしまうだろう。「おまえはじぶんが生きなればならないように生きるがいい」という言葉が、好きだ。生きてゆくというのは、生のもつあいまいさ、貧しさ、複雑さを、つまりわたしたちの世界にはなにかしら欠けたものがあるという酸っぱいおもいを切りかえし、切りかえして生きてゆくことであり、それは、一見どんな怯懦⁽²⁾に、また迂遠⁽³⁾にみえようと、支配することをせずに、しかも支配の思想をこえる途⁽⁴⁾をつつみもつひとりのわたしの生きかたをみずからの〈生きる〉という手仕事⁽¹⁾のうちにつらぬいてゆくことだ。

失われた時代の、失われた人びとの、失われた言葉への旅をとおして、わたしがじぶんの目とじぶんの足で確かめたかったのは、〈生きる〉という手仕事⁽¹⁾を自覚してじぶんに引きうけた人たちの生きかたが、わたしたちのいま、ここに遺⁽⁵⁾した未来⁽⁶⁾だ。遺されたその未来⁽⁶⁾にむけて、わたしは、「おまえはじぶんが生きなればならないように生きるがいい」というロシアの老帽子屋の言葉を、⁽⁴⁾「おまえは希望としての倫理によってではなく、事実を倫理として生きるすべをわがものとして、生きるようにせよ」というふう⁽⁷⁾に、あらためていま、ここに読みかえることで、その言葉を、さらに今後⁽⁸⁾に記憶しつづけてゆきたいのである。

(長田弘『失われた時代』より)

問一 傍線部(1)はどのようなことをいっているのか、わかりやすく説明せよ。

問二 傍線部(2)を、帽子屋のいとなみに即してわかりやすく説明せよ。

問三 傍線部(3)をわかりやすく説明せよ。

問四 傍線部(4)の「希望としての倫理によって」生きることと「事実を倫理として生きる」ことの違いをわかりやすく説明せよ。

二

次の文を読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

書かれる言葉は、話される言葉と違って、実は時代や社会によつてその使命や性格を非常に異にしている。昔のことは今は言わない。現代においては、それはたいていの場合目で黙読されるために印刷される運命にある言葉であり、少なくともそれを理想的境地として目差している。このように印刷されるといふことは、書かれる言葉にとつて決して軽視されることのできない意義をもっている。アランはそこに近代散文の主要特徴をさえ見ているくらいだ。彼は言う。「散文の特性は、先ず第一に印刷された紙の上に、その純粹な抽象の形態において現われ、何ら作家の身体の動きのあとかたをとどめぬことにある。」彼に言わせると、肉筆で書かれたものは、続け字や略字のためにその行間になお何か身振りのものや舞踏的なものを残しているが、印刷はそれを払拭して、抽象的に均一化するのである。

しかし書くということには、彼が指摘しているようなかかる表面的な身体性ばかりでなく、もつと深いところに根差している身体的なものも現われており、そのものの払拭も印刷の役目の一つになっていないであろうか。というのは、作家の表現の努力そのものあとかたであるところの、消し、直し、書き足し等が、書く行為には多少とも必ず随伴しているからである。しかしかかる書く工作のあとをありありと示している大作家の「原稿」を写真版にして忠実に示したからと言って、彼の傑作の一頁がより美しいものに見えることになるであろうか。⁽²⁾必ずやその効果は逆であろう。

ここに話される言葉と書かれる言葉との第一の相違点がある。話される言葉は本来即興的にほとんど猶予なしに産出され、産出されるままに多少の訂正と彫琢とを受けながら、しかも多くは未完成にとどまったままその使命を終えてしまうものであるのにひきかえ、書かれる言葉は一定の時間をかけられて構成され、再構成され、とにかく仕上げを完うされたものとして、しかる後にその使命を果たさんがためにおもむろに提出されるのが普通である。前者はその場限りの試作、後者は多少とも持続に運命づけられた完成品。前者には関係者は現場のごたごたの中で立ち会い、後者には関係者は工場を離れた出来上がった品物だけとして見参する。

これらは極めて卑近な観察にすぎないが、しかしそれからだけでもありのままの話される言葉と一定の目標と境地とを目差さねば用をなさぬ書かれる言葉とが、いかに違って来なければならぬかは明らかであろう。かくて話される日常の言葉とその組立てとがたとい文章の前提ではあっても、文章はどんな初歩的なものでも例外なく何らかの思想の絆によって全体が貫かれ、引き締められ、この全体的連関の見通しにおいて、絶えず後ろを振りかえり、且つ前を見してそこから余計なもの、冗漫なもの、重複的なものを取り除くという心構えと作業を欠かさずに行かないのである。ヴァレリーの次の言葉は、この原始的な基礎工作が、文章の第一歩であることを言おうとしているのであろう。

『いやあ。』——『つまり。』——『ネ・ス・パ？』等々。^{*} こういったような模索の言葉はすべて書かれた言葉から消されてしま
うのだが、これが文章の最初の行為である。」

³⁾ かかる何でもないような浄化の仕事が、既に書かれる言葉を話される言葉から区別させているのであるが、そのような工作はやがて曖昧な言い廻しや陳腐な月並句等々を除去してゆき、ついには耳にうったえるようなものさえも慎重に回避するに至るのである。というのは、アランの言ったように、「眼のためにつくられたこの芸術(散文)においては、すべて耳にうったえるものは下品になる」から。演説口調の、調子づいた、それに反復句の多い文章が、洗練された散文読者にとって我慢のならぬ悪趣味として不快感を催さしめる事実を我々はしばしば見ているのである。

(林達夫「文章について」より)

注(*)

ネ・ス・パ？＝フランス語の付加疑問文。「～ですよね」という念押しの際に用いる。

問一 傍線部(1)はどのようなことか、わかりやすく説明せよ。

問二 傍線部(2)のように筆者が考えるのはなぜか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどのようなことか、「書かれる言葉」の特質をふまえて説明せよ。

三

次の文を読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

(1) 文かく事は用広きわざにて、よろづ何さまの事も文に載せたる、後の世にも伝ふべきものなれど、おろそかになすべからず。もしその書きざまつたなき時は、このころを尽す事かたし。かかれば心あらん人は、よく文のかくやうを学びてあるべき事なるを、今の世の人はただ月をあはれみ、花をもてあそぶなどの、⁽²⁾はかなき心やりぐさとのみおもへる人の多かるはたがへり。この頃『閑居筆録』といふものを得たるに、文のこと記せるにいと心ゆく論あり。かの都に名高かりし伊藤の翁が^{よはひ}齡の末に書かれたるものとぞいふなる。その書にいへらく、

古人^{コト}、為^ス文^ヲ如^ク病^ニ家^ノ作^リ書^ヲ請^ヒ医^ヲ窮^ク人^ノ写^シ帖^ヲ貸^シ錢^ヲ唯^ダ恐^ル其^ノ意^ニ之^レ不^レ達^セ而^{シテ}聽^ク
 者^ノ之^レ不^レ察^セ何^ノ暇^{アリ}奇^ニ崛^ニ其^ノ句^ヲ凋^ニ繪^シ其^ノ詞^ヲ以^テ求^メ勝^ツ哉^ト

といへり。これよく文つくる心得をさとせり。さいへど漢文^{からのみ}の事は、わがよく知らぬ事なればいはいはじ。近き頃の人の和文^{やまのみ}をつくるを見るに、みだりに人の耳とほき古言をつづりて、人をおどろかさんとする人多し。もと文のつたなきも、たくみなるも、さとびたるも、みやびたるも、詞の古きあたらしきによるにはあらず。そは詞の用ひざま、その趣^{おもむき}を得たると、趣を得ざると、その人の心のさとり明らかなる^と暗きとにあり。ことのいひざまいやしからず、心よくとほりて、とこのほり正しきをよき文とはいふになむ。

(村田春海『織錦舎随筆』より)

注(*)

伊藤の翁||江戸時代の京都の儒者、伊藤東涯。『閑居筆録』はその晩年の漢文随筆。

作書、写帖||ともに手紙を書くこと。

貸||ここでは借りるの意。

奇崛||奇抜なさま。

瑠絵||美しく飾ること。

問一 傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)を、必要なことばを補いながら現代語訳せよ。

問三 この文では、文章をどのように書くべきだと説いているか。文中に引用されている「伊藤の翁」の意見をも含めて簡潔に説明せよ。

問題は、このページで終わりである。